

《史料紹介》

翻訳 「フリート監獄結婚商人」

——『ニューゲイト・カレンダー』より——

入 谷 亜希子

はじめに

本稿は通常「ニューゲイト・カレンダー」と称せられている書物の中から、フリート結婚事情を説明した項を訳出したものである。底本としてPelham,C,*The Chronicles of Crime*, London,

1841の第1巻159頁から164頁¹⁾までを用い、随時Rayner,John,L., and Crook,G.T.,*The Complete Newgate Calendar*, London,1926の250頁から260頁²⁾を参照した。訳出の際、文章のニュアンスや重要な語を明らかにするために括弧内の英語で補ってある。

イングランドでは12世紀から19世紀中ごろまで公開処刑が行われていたが、16,7世紀頃から犯罪者に関する情報を印刷した瓦版がその際民衆に出回るようになった。そこには犯罪者の略歴等が書かれてあったが、18世紀初頭からそれら瓦版が本にまとめられるようになった³⁾。これらの本が「ニューゲイト・カレンダー」と呼ばれているものであり、確認できただけでも10人以上の編者により20種近く出版されている⁴⁾。ただ今回の訳出によっても明らかになることではあるが、編集の際多少なりとも編者の意見や時代差説明がなされたようである。今回扱う事件は18世紀半ばのものであるが、扱う史料は19世紀半ばのもので、約一世紀の時代差があるため、所々編者の挿入と思われる部分も見受けられたが、では逆にどの部分がオリジナルであるかに関しては定かではない。しかし翻って20世紀初頭の同箇所⁵⁾を確認してみると、以前の編者の手による挿入箇所が抜かされており、反対に別の箇所に新たな挿入が追加されていることがわかった⁶⁾。

以上のような状況において、オリジナルである瓦版そのものの入手が困難である以上、あらゆる編者によるこの「ニューゲイト・カレンダー」はある事件や人物、事件当時の社会状況のみならず、編集された時代の社会状況をも詳しく知る重要な手がかりとなり得る。翻訳に際しては、内容が18世紀イングラ

ンドのものであることを、さらには編纂されたのが19世紀半ばであることを考慮して、出来る限り適語を使用し、随時脚註にて説明を補うことを心掛けた。

肝心の内容であるが、今回扱ったのは18世紀半ば(1754)に制定された「結婚法」に対する違法行為で逮捕、流刑された二人の人物に関する説明記事である。しかし実際この二人について書かれているのは最終段落のみであり、それ以外は全て「結婚法」制定に至った理由説明である。ストーンは17,8世紀のイングランドにおける配偶者選択あるいは結婚の実態に関して、次のように述べている⁷⁾。

十八世紀半ば頃には、州の首都の施設に集中した一連の結婚市場と、ロンドンとバースに集中した全国的な結婚市場の二つが存在した。ハードウィック卿の「結婚法」が効力を発するようになった一七五四年以降、両親は子どもたちがかつて以上に自由に異性と交際するのを許すことができた。というも、彼らには、彼または彼女が不適當な相手と秘密の、しかし拘束力のある婚約を交わすことはもはやできず、はるばるスコットランドまで旅行して秘密の結婚をすることができるだけである、との最小限の確信があったためである。

ここに出てくる「結婚法」成立の詳しい事情が、紹介する史料から窺い知ることができる。すなわち「結婚市場」とは一体どういうものであったのか。何故「結婚法」によるある種の規制が加わることで、逆に異性と交際が自由になり得るのか。ここでいうロンドンに集中した結婚市場とは紹介記事に出てくるフリート監獄のことであるが、この監獄の事情を理解しない限り、1757年の結婚法を関知しているだけでは不十分であると言えよう。

今回翻訳で扱った記事内容は、「ニューゲイト・カ

レンダー」に収められた数ある事件のうちのほんの一つに過ぎない。しかし、ある一つの事象からいかに多くの事実・虚実を引き出せるか、その可能性を見ることができただろう。

ジョン＝グリーンソン師及びウィルキンソン師 一違法に結婚式を執り行ったことによる流刑罪一

礼儀作法に対する無頓着さゆえに、我々の祖先には風変わりな慣習があったが、その中でも著しく変わっていたのは、フリート監獄(The Fleet prison)の教区牧師によって正式に執り行われた(と言いたいところだが)、正確には「演じられた(“performed”)」婚姻である。こうした聖職役人⁸⁾らは、大半は債務囚人である評判の悪いふしだらな男たちであり、風紀を大きく乱した。そしてまるでどんな人もそのためだけに生きているかのように、ささやかな告知によるフリート監獄内での結婚式を行って、自分たちの神聖な職業の品位を敢えて貶めた。

何の質問もなく、何の契約書も作られず、必要なのは式のための費用と儀式で飲むお酒だけ。式が執り行われている正にその最中に、牧師、新郎新婦の皆が酔っぱらっていることも珍しくはなかった。こうした神聖な職業を持つ恥さらしな人たちには手下の客引き(“plyers,” or “barkers,”)がついており、彼らは近所の通りを仲良く歩いている男女を見つけると、今日のユダヤ人呉服商がしつこくホリウエル街まで追いつめてするように⁹⁾、相手が首を縦にふるまで牧師による結婚を勧誘するのである。フリート登記簿に関する興味深い研究書を最近出版したバーン氏¹⁰⁾は、「レダリフにおけるすがすがしい若い船乗りと女主人の娘のフリート結婚(A Fleet Wedding)」という(1747年に出版された)版画を持っていると言う。この版画からはかつてのフリート市場や監獄の様子、そしてたった今貸し馬車から降りてきた船乗り、女主人そしてその娘、二人の聖職服を着たフリート監獄の牧師が仕事を奪い合っている姿が描かれている。そして余白には以下のような詩があった。

馬車がきちんと運賃をもらうことは滅多にない
しかし熱々の二人を囲んで群衆は見とれている
忙しい手下どもは積極的に活動をし
囁いたり叫んだり、牧師はいかがですか、旦那？
どうぞこちらへ、ペンさえあればいいですから

あなたのために医者はずぐに來ますから
こちらですよ(別のが叫ぶ)、旦那、保証します
本物の昔からの登記簿はこちらにあります

驚いた教区牧師は即座に喧しい音を聞きつける
そして急いで中へ引き込む穏やかな言葉を言う
この押し合いへし合いの混乱の中
お互い夢中の二人はどこへ行けばいいのやら
やがて馬車脇からゆっくり進んでいくと
勝手知ったる既婚婦人が来る(巧みな先導で)
どちらのこともおままいなく連れていき
先の教区牧師が二人を結婚させる

このようなけしからぬ役人どもの中で最も悪名高い者のうちの一人は、スコットランドの牧師であったジョージ・カイトである。彼は絶望的な生活状況下でメイフェアに結婚事務所を興し、後にフリートで事業を展開した。この男の結婚商売はあまりに大規模でひどいものだったため、ロンドンの主教は彼を破門するほどであった。彼と彼の手下(“his journeyman”¹¹⁾)について、聖霊降臨祭のある朝、週間死亡者表に載っているどの十個の教会で執り行われた結婚よりもはるかに多くの男女を結婚させたという逸話がある。カイトは89歳まで生き、1735年に死亡した。ゲイナム博士はまた別の悪名高い役人であったが、俗に地獄の主教(the Bishop of Hell)と呼ばれていた。

「初期のフリート結婚の多くは、本当にフリート監獄内の礼拝堂で執り行われていました。」バーン氏は言う。「しかし慣例が拡大するにつれ、フリート監獄の規則からも、他の場所でやる方が都合がよくなり、(さらに言えば、彼らを追いやるために国会制定法により教会委員が廃止された、)それゆえ多くのフリート教区牧師と近所の居酒屋の主人は各自の公舎や住居のうちの一部屋を礼拝堂に整えたのです！牧師は謝礼を受け取り、手下に分け前を与えました。また居酒屋主人は報酬を受け取る上に、式に出席するご一行が飲む酒を売る特権まで得ました。中には牧師を週20シリングで住居に住ませる者までいたのです！フリート監獄近辺の大抵の居酒屋は独自の登録簿を持っていましたが、そこに(自分自身の記録簿に書くのと同じように)教区牧師は結婚の記録をつけていきました。」こうした最も高位な職を持つ恥ずべき人々は、「結婚式お安く引き受けます

（“WEDDINGS PERFORMED CHEAP HERE”）」と書かれた看板を窓に掲げるのが常であった。

既に話したカイトはずうずうしい放蕩者であったように思われるが、ウォルター・ワイアットというフリート監獄の教区牧師には何かが良心の呵責と罪の意識に非常に影響を与えたい。というのは、1716年の彼の手帳には以下の秘密の（彼はそれを望んでいた）悔恨の吐露が書きつけてあった。

「全ての人が当然支払われるべきものを得、真実の方向を学びますように」

「この助言はフリート監獄での結婚に関与する者には意味を為さない。当然すべきことすらしない聖職者が望んで飢え死になどするはずがない。愚かで不用心な人々に嘘をつき、脅し、罵ることでお金を騙し取って、お前は商売を広げ、悪銭を得る。そしていつも晴れた日の雪のようにそれを消費する。」

「主を恐れることは知識のはじめである。フリートでの結婚は永遠の災難のはじまりである。」

「もし牧師かその手下が嘘を言ってきたら福音文と同様に真実であると断言せねばならない。またもし口論になれば全くもって忌々しい欺瞞の真実を誓って断言せねばならない。」

「神よ、過去のことを許したまえ。死を望まない限り真実と徳があり得ない不道德な場所から逃れる慈悲を与えたまえ。」

しかし自分の不名誉を深く自覚し、明らかに悔恨している正にこの人物こそ、フリート教区牧師の中で最も悪名高く、積極的に荒稼ぎをしていた男なのである。彼の業務は主に居酒屋で行われ、たったひとりで60ポンド近くは稼ぎ出していたことで知られている。

たやすく結婚でき、牧師もいい加減なことから、フリート結婚の名の下にあらゆる不正が為されていた。ただろことは容易に想像できる。教区牧師らは、登記簿に嘘を記載すること、結婚日の書き換え、偽りの証明書を発行すること、自分の名前の頭文字しか言明しない人の結婚を執り行うことを賄賂のために喜んでする。例えばもし借金をした未婚女性あるいは未亡人が借金契約前に結婚していたことにしたいとき、彼女はただフリートの結婚宿に行きさえすればいいのである。ちょっとした追加料金を牧師に払えば、直ちに数シリングで新郎として演技してく

れる男性が連れてこられ、取るに足らない牧師は自分の登記簿のどの年にも空白を見つけることができるので、必要な記録をつけるのに何の問題もないのである。彼らはまた報酬目当てに既に登録されたものを消すこともする。詐欺師の花婿は異なった名前で、牧師開業者の豊富な知識の下、何度も何度も結婚をしていた。別の例だと、もしふしだらな男が若くて疑うことを知らない娘を手に入れたいと思ったら、名前すら言わなくても式が挙げられるフリートに行くことほど簡単なことはない。こうして哀れな娘は何も知らずに希望を断ち切られるのである。あるいは両親が私生児である実の子どもを嫡出と認めたいとき、フリートの牧師によって好きな日付の結婚証明書を手に入れることができた。事実、あらゆる種類の人が結婚の為にフリートにある居酒屋の罪深い巢穴に姿を現した—貴族の家出息子や家出娘—アイルランドのいかさま師と愚かな金持ちの未亡人—田舎者と聖人の子孫である女性—従僕とかつての美女—兵士と召使いの娘—10代の男の子と70歳の老女—捨てられた情婦、つまり以前の崇拝者から哀れで下劣な花婿に譲られた（“given away”）のである—一夜の放浪者や酔った徒弟—既に妻や夫のいる男や女—無理矢理連れてこられて強制的に脅されて（in terrorem）結婚させられた女子相続人—教区の役人によって不敬な正餐台に引きずり込まれ、酔っぱらったどんちゃん騒ぎや酒や煙草の悪臭で名声を汚した普通の労働者や貧民女性！いや、契約をしたい一行（“contracting parties”）が取るに足らない家々から速攻で手配されたフリート牧師のいるところへ連れてこられ、そこで結婚式を執り行うなどということは時々起きているのである。

「教区結婚（“Parish Weddings”）」と言われているものが、いかに神を冒瀆しているかはいくら話しても話し足りない。当時の多くの教区委員や民生委員は、自分の教区にいる貧民を近隣教区に放り込むために仕組んだ結婚（“getting up” marriage）を頻りに執り行った。例えば1741年7月4日のデイリーポストには次のような記事が載っている。

「先週の日曜日、市内のある教区の教会委員は自分たちの肩の荷を降ろすために、アンブローズ・タリーという名で知られる哀れな盲目の若者に40シリングとフリート結婚での費用を渡した。彼はムーアフィールドでバイオリンを弾き、ショールディッチ

教区にいる妻とやがて生まれてくる子どもの生活費を稼いでいた。目的を確実にするために教区役人に式が遂行されるのを見に行かせた。不正な犯罪に手を貸したりや不法行為を促進させることがこれほどまでに嘆かれているのと同様、フリート結婚を助長する教区には驚嘆せざるを得ない。花嫁の教区の財産を浪費させるために数多くの貧しくて哀れな若者が勧誘された。」

1735年のグルール・ストリート・ジャーナルに掲載された以下の手紙にはフリート牧師の背信的で卑しい習慣がはっきりと描写されている、とバーン氏は言う。

「拝啓—この街には我々女性にとって危険な結果となり、決して抑えられることのなかった悪が蔓延しております。毎年数百もの若い子が多大なる偏見と破滅に追いやられています。私は教養ある方々に将来こうしたことが起きないための適切な手段と方法を考え、調べていただきたいのです。つまり、フリートやそこらでの破滅的な結婚のことを言っているのです。それは手下と共に黒い法衣を着ていかにも牧師然と振る舞い、酔っぱらって口汚く罵っている教区牧師が気ままに執り行っているものです。こうした邪悪な牧師はラゲイトヒルで仕事に精を出し、人々をつまらない居酒屋に引っ張り込んで結婚するように強制し、日曜日であったとしても教会に行く人々を止め、ほとんど服を脱がさんばかりに引き込むのであります。こうした事実を証明するために、最近起きた出来事をいくつかお教えしましょう。

夏以来、生まれも育ちも申し分のないある若い女性が、悪事を働き放蕩を続ける不信心な悪党と結婚するよう、友達に、そして首のねじれた乱暴な口をきく教区牧師によっても惑わされ脅されるようになりました。そして彼女の破滅からしばらくして、別の私の知り合いの女性が以下のようなやり口でずたにされそうになったのです。彼女はデュルリーレインの古劇場である上流婦人と会う約束をしていましたが、婦人は予想外の用事で来られなくなりました。上演終了後一人でしたので、彼女はボーイに市内までの馬車を呼ぶように命じたところ、紳士らしい格好をした男が彼女が乗り込むのを助け、自分も後から飛び乗りました。「マダム、これは私が呼ん

だものです。あいにく天気も悪く替わりの馬車もないので、よろしければ相乗りしたいのですが。私は市内に行くし、あなたが行きたい場所までお送りいたしますよ。」彼女は丁寧に断ろうとしましたが、男は既に御者に動かすよう命じてしまいました。ラゲイトヒルまで来ると、路地の五つドア先に妹が自分を待っていて2分で合流するからと言って男は行き、妹の振りをした女と戻ってきました。女は自分が馬車の中で待っているから、ちょっと家に寄ってはどうかと婦人を誘いました。女も一緒にいるものと勘違いした彼女は、愚かにも女について家の中に入ります。すると女は即座に消え、黒い法衣に黒い髪をつけた日に焼けた輩が現れたのです。「マダム、ちょうどいい時にいらしゃいました。医者がちょうど行ってしまふところでした。」「医者ですって！」彼女は急に自分が精神病院にいるような気がして、恐ろしくなりました。「医者が私に何をしてくれるの？」「あそこの紳士と結婚させるんだよ。君をこの3時間ずっと待っていたんだ。費用は君かあの紳士が払うことになっている。」「あの紳士の方が、」彼女は自分を取り戻して言いました。「私より財産を持っているでしょう。」「そして行かせてくれるよう懇願しました。しかしライネック医師は結婚するよう彼女を罵り、もししなくても費用はもらうしその晩からの結婚証明を登録すると脅しました。費用も誓約も逃れられないと悟った婦人は、その紳士が大変気に入ったので、明晩必ず会いに来ると言い、その証に指輪を渡しました。「これは母が死に際にくれたもので、私が結婚するときには結婚指輪になるだろうと楽しみにしていたものなのです。」「こうした巧みな策略によって、彼女は腹黒い医師と日に焼けた連中から自由になれたのです。後日昼間に、私はこの婦人と彼女の弟と馬車でラゲイトヒルに行き、結婚させる人を捕まえる彼らのやり口を観察しました。我々の馬車がフリート橋近くに止まるや否や、手下の一人が乗り込んできました。「マダム、教区牧師がお寄りですか？」「あなたはどなた？」「私はフリート内の登記係です。」「じゃあ礼拝堂を見せて。」「そこで二人目の人物が現れ、自分についてきて欲しいと言いました。「あいつはつまらない居酒屋に連れていくだろうからね。」「すると三人目が現れ、「私と来なさい。彼は君を酒屋に連れていくだけだからな。」「と言います。その間に例の医者がやってきました。「マダム、私がすぐに相手になってさしあげますよ！」「ありが

たいのですが、あなたも納得できないでしょうし、私もすぐには結婚できないので、また別の機会にしましょう。』私はそう言って追い返しました。教養ある紳士方、私はこれを女性の名誉と安全のために書いたのです。もし我々のために親切にも(女の筆による誤りを正して)この文章を公にして下さるなら、これ以上に我々を喜ばせることはないでしょう。

あなた方の熱心な読者かつ崇拜者より 敬具」

こういったものはしかし、フリート牧師によって執り行われる不正のうちのほんの数例にすぎない。メイフェアの礼拝堂で、バラの造幣局で、サヴォイで、あるいはロンドンの他の場所で、似たような取引が続けられていた。しかしそれも、あるスキャンダル—特に、ヘンリー・フォックス子爵とリッチモンド公爵の長女ジョージアナ・キャロラインがフリートで結婚したというもの—があまりに大きくなりすぎた結果、ついにある法案が可決されるまでの話である。結婚法案(a Marriage Bill)は一しかしながらこの法案に対する熱心な反対者が全くいなかったわけではないのだが—以下のことを制定したものであり、可決された。誰であろうとも教会あるいは公の礼拝堂以外のところで、結婚予告あるいは許可なしに結婚式を執り行った者¹²⁾は、有罪判決の下、重罪(*guilty of felony*)とされ14年間の流刑となる。また、そうして執り行われた結婚は全て無効(*should be void*)とする。この制定法は1754年3月25日¹³⁾から発効されることになっていた。

この法律の制定に伴って、カイト—もう既にお馴染みになっている人物であるが—は、「不法な結婚を阻止する法律に関する意見」と題するパンフレットを発行し、題の前には自分の肖像画まで載せた。以下の文章がその主な内容である。

『「求婚されたときが一番幸せなとき¹⁴⁾』という諺は大変古くからあり、それは非常に真実をついているものである。しかし我々は来る3月25日以降、そうした機会に接することができないだろう。その日から我々はその諺に氣後れさせられ、その時から(実に古きイングランドには致命的なことに!)イングランド住民の減少を記録せねばなるまい。』「数千人もの人々の結婚を取り持ち、必然的にその時の下層階級の人々の遊び心を見てきたが、私はしばしば結婚したばかりのカップルに知り合っどどのくらいかを訊

ねた。彼らは、それ以上の場合もそれ以下の場合もあったが、大抵は1週間も交際していなかった。中にはたった1日、半日という者さえいた。』「この法律によって起きてくるであろう別の問題は、結婚費用が非常に高いため、下層階級のほとんどの人々がその費用を賄えないだろうということだ。多くの人々が結婚したいときにやってくるが、ポケットには半クラウンとポット一杯分のビール代のための6ペンスしかなく、それも服を質に入れてこしらえたのだった。』「よく覚えているのだが、ある時ラドクリフのパブにいと、そこは水夫と彼らの女たちであふれており、飲めや歌えやの騒ぎだったのだが、ついに一人の水夫が言い始めた。『おい、ジャック。俺は今から結婚するぞ。彼女を自分のものにするんだ。それから…』この冗談は受け、2時間以内に10組ものカップルがフリートに向けて出発した。私はその場で彼らの帰りを待っていました。彼らは馬車で帰ってきた。5人の女性はそれぞれの馬車に乗り、水夫は前や後ろを走ったり、馬車の上に乗ったりしていた。馬車行進は終わり、夫婦らは上の階に上がっていき最高の夜を過ごすのである。私は次にそこに行ったとき、居酒屋の主人にこの結婚事件について聞いてみた。彼は最初に私をじっと見てから思いついたのか言った。ああいったことはあまりに頻繁に起こるから、全く関心を寄せていないのだと。というのも、つけ加えて言うなら、フリート結婚が流行って以来、水夫の間で週に200から300もの結婚があるのは極めて当たり前のことだからである。』彼は滑稽に結んでいる。「仮に今の法律が国中で施行されたとしても(それは不可能だと思ってるが)私はそのことに満足するだろう。というのも、法の制作者たちは私の礼拝堂を抑えようとは夢にも思っていないからね。それで私は英国中で最高ではないにしろ、最も名高い男になれるのさ。』

結婚法案の通過によってメイフェアでの結婚はできなくなった。しかしその法律施行(1754年3月25日*)前、61組のカップルが式を挙げた**。

*1753年7月17日付けのジョージ・モンタギュー卿宛ての手紙の中で、ホレイス・ウォルポールは次のように述べている。

「アン・ポーレット卿夫人のお嬢様が田舎の牧師と駆け落ちをしました。アーガイルの公爵夫

人は結婚法案が直ちに施行されないことに反対する大演説をなさり、施行日前に駆け落ちをしようとしていた全ての未婚女性はやめるよう説得させられました。」

「ホレイス・ウォルポールはジョージ・モンタギュー卿宛ての手紙の中でカイトに関して以下のように触れている。

「1753年6月11日、ストロベリー・ヒルにて結婚斡旋屋であるカイトに関して、機知に富んだ冗談をお教えするだけで充分でしょう。『主教！¹⁵⁾』彼は言いました。『奴らが俺の結婚事業を妨げるのか。やらせておくがいい。だが恨みは晴らすぞ。2,3エーカーの土地を買って、主教どもをみんな埋めてやる。』」

この短い概略では、自分の名を汚し、我々の最も神聖な制度を不信心にもいい加減に扱う様々な牧師の醜聞の数々を全て公にすることはできない。このような邪悪な詐欺師は単に聖職者の振りをしているということは確かである。しかし聖職者のほとんどが実際に正式に任命されたのだということも否定できない。

最後に我々の現在の関心事であるグリーンソンとウィルキンソンについて話そう。例の法令によって重い刑罰が課せられるにも関わらず、彼らは自分たちが手を貸している危険で不正な取引の継続を思いとどまることはなかった。ウィルキンソンは、当時名の知れていたコメディアン兄弟であることが判明したのだが、サヴォイにある礼拝堂の持ち主であり、グリーンソンは彼の助手をしていた。ついに彼らの利益は見逃すにはあまりに悪評高くなってしまったため、調査されたのである。最初グリーンソンが捕まり、彼の雇い主は上手く逃げおおせた。しかし実際には手下にやらせて自分自身では結婚式を執り行っていないので、どんな違法行為もしていないと自分で思ったのか、自分の巣穴に戻って来た。そこで間もなく捕まり、グリーンソンと共に有罪判決を受け、1757年、罪人として二人は植民地に送られた。

- 1) 原題は、The Rev.Jhon Grierson and The Rev.Mr.Wilkinson-transported for unlawfully performing the marriage ceremony, である。
- 2) 同様に原題は、The Rev.Jhon Grierson and The Rev.Mr.Wilkinson-transported for unlawfully performing the marriage ceremony in 1757.A glimpse into a shameful custom which led to the passing of the Marriage Act in 1754, である。
- 3) 最初のニューゲイト・カレンダーといわれているものは、アレグザンダー・スミスによって1719年に出されたものである。
- 4) しかし現在全てが確認できるわけではない。また同一編者が数年おきに改訂版を出している場合も多々ある。また時代が下れば下るほど参考にした版が重複する傾向が大きく、管見の限りではその内容はほとんど変わらない。
- 5) 先述したレイナー&クルック編1926年版251頁
- 6) 今回は随時1926年版との比較を行った上で1841年版の訳出を試みたが、時代背景を考慮するには非常に有効な手段であったと言えよう。また史料比較については紙面の都合上割愛するが、別の機会に論じてみたい。
- 7) Stone,L.,*The Family,Sex,and Marriage in England,1500-1800,England,1977* 北本正章訳『家族・性・結婚の社会史』勁草書房、1991、p272
- 8) 原文ではclerical functionariesとなっており、本来の職務をやらずに結婚を執り行う監獄内の牧師に対して、皮肉をこめた、かつかなりけなした言い方になっている。
- 9) これは編者ペラム(Pelham)が挿入した解説であり、ここでいう「今日」とは19世紀半ばの状況であると推測できる。
- 10) 同様に編者の挿入部と思われるが、バーン氏(Mr.Burn)やその著作についての詳細は明らかにされていない。
- 11) このjourneymanには、一人前の職人という意味があることから、手下について、カモを上手く捕まえる腕前を持ったという意味合いが言外に含まれているものと思われる。
- 12) ここでの原語は“solemnizing”であり、文字通り「結婚式を正式に執り行う」の意である。ここにきて初めて使用された語であり、それまでは史料冒頭で説明が為されていたように、“perform(演じる)”が「執り行う」の意で全て用いられていた。
- 13) 以下3月25日と訳している箇所はその大半が原文では“Lady day”となっている。この日は受胎告知の祭日であり、スコットランドを除く英国では四季裁判所(quarter sessions)が開かれる最初の月、さらには四期制勘定支払日(Lady day) - 3月25日である。
- 14) ‘Happy is the wooing that is not long a-doing’ 幸せは長続きしない、の意。
- 15) 原文では‘G-d d-n the Bishops!’ となっており、下品な言葉が書かれてあったものと推測される。